

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 22 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24320159

研究課題名(和文) 縄文時代における長期継続型地域社会の変容と弥生時代への変遷に関する研究

研究課題名(英文) A Study on the Transformation of Long-Term Regional Societies during the Jomon Period and the Transition to the Following Yayoi Period

研究代表者

阿部 芳郎 (ABE, Yohiro)

明治大学・文学部・教授

研究者番号：10221730

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,900,000円

研究成果の概要(和文)： 縄文時代から弥生時代への変遷は、気候の寒冷化による環境の悪化という自然的な要因と稲作農耕の導入という文化的な要因によるものと考えられてきた。本研究はこうした従来の説について3つの視点から分析をおこなった。遺跡から出土する動物遺存体にみられる寒冷化の有無、遺跡から出土する植物遺存体にみられる寒冷化の有無、縄文時代の中期から晩期の時期の遺跡群の内部で起こった生業や社会の複雑化の要因。そしてこれらの視点からは、自然環境の大規模な悪化は認められないこと、さらに社会構造が複雑化して、生業活動が分業化してゆく傾向が認められた。

研究成果の概要(英文)：

Japanese archaeologists have previously considered the climatic deterioration, especially decrease in temperature, and the introduction of methods of wet rice cultivation to Japan as the major factors for cultural changes from the Jomon to Yayoi Period. The principal investigator has examined these hypotheses from the following three perspectives: 1) whether the decrease in temperature is reflected in zoo-archaeological evidence or not; 2) whether the decrease in temperature is reflected in paleoethnobotanical evidence or not; and 3) what were the major factors for the increased complexity of subsistence and social organizations from the Middle to Final Jomon Period that took place at archaeological sites. The results of analysis conducted by the principal investigator, however, have revealed no evidence of climatic deterioration. Furthermore, as the social organization became more complex, the subsistence activities became more specialized.

研究分野：先史考古学

キーワード：先史考古学 社会構造 生業 縄文時代

1. 研究開始当初の背景

申請者はこれまで関東地方東部地域において、継続的に縄文時代の後期から晩期の遺跡の調査研究をおこなってきた。その結果、縄文時代後晩期の遺跡が特定地域において群集化し、その内部において、土偶の多量化や祭祀の活性化などの後期から晩期を特徴づけるとされる諸現象が確認できた。

一方、これまでの縄文時代に関する基礎的歴史認識の中に、中期を繁栄の頂点とする発展史観が形成され、後期から晩期は遺跡数の減少や祭祀遺物の多様化、多量化などから、文化が停滞した後に、稲作農耕社会へと変遷したという歴史観が根強い。

その要因の1つに全球的な気候変動による気候寒冷化が指摘されることが多い。しかしながら、寒冷化が具体的に影響したと思われる動植物資源の分析はほとんどおこなわれていない。また関東地方では、晩期後半に減少した遺跡数は、弥生時代の中期後半になるまで回復しない。このことは、稲作農耕社会が人口の増加や社会の発展に直接的には結びつかないことを予測させるものであった。

本研究の背景は、これまでの申請者の分析結果に基づき、先験的な歴史認識の中にある縄文時代後期晩期の実態を実証的な研究によって解明することが急務の課題であると認識された点にある。

2. 研究の目的

本研究の目的は縄文文化の停滞期として認識されてきた後期から晩期の実態を居住形態と生業構造及び祭祀の活性化という3つの視点から解明することである。そのためには、広範な地域を対象とした、特徴的・代表的な遺跡を分析して得られる最大公約数的なイメージよりも、むしろ検討する地域を限定して、現象の相互関係を評価するための高い精度の分析をおこなう必要がある。

その意味で本研究は将来の広域な地域を

対象とした研究の展開を見据え、分析手法の確立に焦点を持つ研究であるともいえる。

3. 研究の方法

本研究は上記の現状の認識と、そこから導かれた課題について、千葉県中央部にある印旛沼南岸地域を対象地域として遺跡の発掘調査と出土遺物の分析研究を行なった。

具体的な手法としては先史考古学による遺跡調査と出土遺物の分析であるが、貝層サンプルにおける動物考古学的な分析を併用し、とくにこれまで縄文時代の生業活動に関しては、狩猟採集社会という概括的な理解が先行し、地域社会の内部での詳細な分析と評価が行われた事例が少ないため、これらの人類活動を資源利用という概念で包括的に扱い、食資源や道具素材など複数の視点からの詳細な検討を加えた。

さらに人骨の安定同位体分析を実施し、生業活動の実態を人骨の古食性から検証した。

4. 研究成果

本研究の成果は4点にまとめることができる。

(1) 長期的継続性を持つ集落の実像解明

分析対象地内には、中期末葉から晩期中葉にいたる長期的な継続性を持つ集落遺跡が群集する状況が確認できた。これらの遺跡がこれまで評価の対象とされることが少なかった理由の1つとして、竪穴住居址の検出事例の少なさがあげられる。しかし、この現象は、申請者によって盛土中に構築された住居址の検出によって後期中葉以降には竪穴住居とは異なる構造の住居が集落を構成していた事実を指摘した。

(2) 長期継続を可能とした祭祀の実像

本研究では、後期から晩期にかけて発達した祭祀として土偶を取り上げた。まず土偶については、後期中葉から後葉に至る時期に多量化が認められた。多量化の要因を解明するため、型式学的手法を用い、細別時期毎に土偶を類型化した。その結果、土偶は後期中葉

の加曽利 B2 式期に 3 つの類型に分化し、土偶祭祀の構成にも変化が生じたこと、これらの種類の保有形態が集落ごとに異なり、中には 600 点余りにも及ぶ土偶の多量保有遺跡が登場する事実を明らかにした。

そして、土偶は妊娠した女性像を表現することから、集団の維持・管理の強化を対象とした祭祀が発達したと結論した。

(3) 多世代化した着装風習の意味

後期から晩期にかけて発達する祭祀遺物として女性の着用品である耳飾と貝輪を取り上げた。貝輪は後期になると全国的に人骨の着装数の増加が認められる。また検討対象地の周辺には貝輪を大量に流通させるために形成された余山貝塚が利根川河口域に出現する。余山貝塚の出土資料については、大阪歴史博物館との共同研究によって、骨角器類のカタログ化、漁労具の実測を行い、生業活動を復元するモデルとした。

こうした特徴とともに、余山貝塚は内陸部へ大量の成品を流通させる起点としての意味を内在させて出現する。遺跡からは膨大な量のベンケイガイとサトウガイを素材とした貝輪が出土している。

貝輪の多数着装例は全女性に平均的に増加するのではなく、多数着装する「個人」の出現によって特色づけられる現象である。さらに、サイズの多様化は着装年齢の多世代化を示唆する現象である。

こうした現象は土製耳飾においても同様であり、着装年齢の多世代化は女性の出自や社会的位階を表示する器具としての性格を保持するものと考えた。

(4) 水産資源利用技術の高度化・重層化

生業活動では、内陸地域における鹹水産貝類の流通と土器製塩に関する分析を進めた。印旛沼南岸遺跡の内部の八木原貝塚において大量の鹹水産貝類の堆積が確認され、ここでは貝層サンプルの分析を進めた。その結果、貝類だけではなく、魚類の出土が確認され、

多様な水産資源の流通があったことが明らかにできた。さらに周辺の群集する集落の内部には、ごく少量の鹹水産貝類の存在が確認できたことから、八木原貝塚は再分配の起点となる集落であると推定した。

土器製塩では、晩期の製塩址の分析を進めることにより、海草由来の微小生物遺存体の存在を確認し、八木原貝塚の貝層サンプルにおいて製塩土器出現以前の時期で同様の痕跡を確認した。これまでは製塩土器の存在のみから論じられてきた製塩活動を多視点的な手法から解明する糸口をつかむことができた。

これまでの縄文時代生業論は、多様な資源の利用形態が論じられてきたものの、社会構造や遺跡間関係からの特質を評価されることが少なかった。この点に重点を置く議論の展開が今後の縄文文化の特質の解明に資する点は少なくない。

これらの成果は公開シンポジウム「縄文文化の繁栄と衰退」というテーマを設定し、2014 年と 2015 年の 2 回開催するとともに、雑誌季刊考古学別冊 21 において『縄文の資源利用と社会』というテーマで協力者の参加を得て刊行した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 10 件)

(1) 阿部芳郎「貝輪の生産と流通」、『季刊考古学 別冊』、第 21 冊、査読なし、pp 99-106、2014 年 11 月

(2) 阿部芳郎「資源利用からみる縄文社会」『季刊考古学』、別冊第 21 冊、査読なし、pp 7-13、2014 年 11 月

(3) 阿部芳郎「縄文時代における黒曜石の利用と特質」『資源利用からみる縄文社会』季刊考古学別冊、第 21 冊、査読なし、pp 7-13、2014 年 11 月

(4) 阿部芳郎「奥東京湾口部における土器製塩の展開」、『北区飛鳥山博物館研究報告』、第16号、査読なし、pp1-26、2014年3月

(5) 阿部芳郎「関東地方における製塩土器の出現過程」、『駿台史学』、第150号、査読あり、pp1-28、2014年2月

(6) 阿部芳郎 河西学 黒濟耐二 吉田邦夫「縄文時代における製塩行為の復元」、『駿台史学』、第149号、査読あり、137-159、2013年9月

(7) 阿部芳郎・金田奈々「子供の貝輪・大人の貝輪」、『考古学集刊』第9号、査読あり pp43-56、2013年5月

(8) 阿部芳郎、「千葉県佐倉市江原台遺跡出土の加曾利B式土器」、『考古学集刊』、第9号、査読あり、pp1-20、2013年5月

(9) 阿部芳郎、「安行式片口注口土器の成り立ちと変遷」、『駿台史学』、第146号、査読あり、pp1-18、2012年9月

(10) 阿部芳郎、「骨角貝器の大量生産遺跡の出現背景」、『考古学ジャーナル』(627)、査読なし、pp3-7、2012年5月

〔学会発表〕(計23件)

(1) 阿部芳郎、「縄文時代をどうとらえるべきか」、第99回歴博フォーラム、2015年12月6日、明治大学(東京都・千代田区)

(2) 阿部芳郎、「縄文後晩期の集落形成と遺跡群」、縄文文化の繁栄と衰退2、2015年11月29日、明治大学(東京都・千代田区)

(3) 阿部芳郎、「縄文の塩づくり～海のめぐみと社会～」、開館20周年特別講演会、2015年11月3日、上高津貝塚博物館(茨城県・土浦市)

(4) 阿部芳郎、「土器製塩の技術と起源」、縄文の資源利用と社会、2015年10月24日、明治大学(東京都・千代田区)

(5) 阿部芳郎、「縄文社会の身体装飾と社会」、考古学講座、2015年5月2日、新宿歴史博物館(東京都・新宿区)

(6) 阿部芳郎、「海藻を利用した縄文の塩つ

くり」、特別展講演会、貝塚研究最前線、2015年4月26日、千葉県立中央博物館(千葉県・千葉市)

(7) 阿部芳郎、「海の恵みと縄文社会」、富士見市考古学教室、2015年3月14日、水子貝塚博物館(埼玉県・富士見市)

(8) 阿部芳郎、「縄文時代後晩期停滞説」の矛盾と展開、シンポジウム縄文文化の繁栄と衰退、2014年11月15日、明治大学(東京都・千代田区)

(9) 阿部芳郎、「縄文時代土器製塩の技術と起源」、考古学研究会東京例会、2014年10月25日、駒沢大学(東京都・渋谷区)

(10) 阿部芳郎、「資源利用からみた縄文文化の特質」、船橋縄文大学、2014年10月1日、船橋市役所講堂(千葉県・船橋市)

(11) 阿部芳郎、「縄文時代研究と中里貝塚の発掘」、岩宿大学、2014年9月28日、岩宿文化博物館(群馬県・みどり市)

(12) 阿部芳郎、「縄文のくらしを掘る～海と森に生きた人々～」、杉並区郷土資料館夏季企画展記念講演、2014年9月23日、杉並区郷土資料館(東京都・杉並区)

(13) 阿部芳郎、「縄文の塩づくり・その起源と技術」、博物館友の会講演会、2014年9月19日、明治大学(東京都・千代田区)

(14) 阿部芳郎、「縄文時代土器製塩の実証と展開」、日本考古学協会第80回総会研究発表、2014年5月18日、日本大学(東京都・世田谷区)

(15) 阿部芳郎、「中妻貝塚の人々とその時代」第35回企画展、記念講演、2014年3月29日、取手市公民館(茨城県・取手市)

(16) 阿部芳郎、「黎明期の貝塚研究～さいたま市真福寺貝塚発掘の意義～」、特別展記念講演会、2014年3月16日、さいたま市立博物館(埼玉県・さいたま市)

(17) 阿部芳郎、「後期社会の貝輪生産と流通 副葬品からみた縄文社会」、2014年2月22日、明治大学(東京都・千代田区)

(18) 阿部芳郎、「日本列島における製塩の技術と起源」、第4回明治大学・高麗大学校国際学会議、2014年1月21日、明治大学(東京都・千代田区)

(19) 阿部芳郎、「縄文後晩期の時代像と地域社会」、平成25年度東京・神奈川・埼玉埋蔵文化財関係財団普及連携事業公開セミナー、2014年1月13日、神奈川県立博物館(神奈川県・横浜市)

(20) 阿部芳郎、「土器製塩研究の展開と多様性」、陸平と上高津～縄文の資源利用と地域社会～、2013年2月17日、明治大学(東京都・千代田区)

(21) 阿部芳郎、「余山貝塚の貝輪生産と地域社会」、下郷コレクションの由来と霞ヶ浦の貝塚、2013年2月1日、明治大学(東京都・千代田区)

(22) 阿部芳郎、「勝坂遺跡と侯爵大山柏」、平成24年度、「勝坂縄文展」記念講演会、2012年12月22日、相模原市博物館(神奈川県・相模原市)

(23) 阿部芳郎、「縄文時代と四街道～千代田団地に眠る縄文の大集落～」、四街道市民大学講座、2012年6月20日、四街道市市民会館(千葉県・四街道市)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

阿部芳郎 (ABE. Yoshiro)
明治大学 文学部 教授
研究者番号：10221730

(2) 研究分担者

樋泉岳二 (TOIZUMI. Takeji)
明治大学 研究・知財戦略機構 研究推進員
研究者番号：20237035

(3) 連携研究者

()

研究者番号：